

2021 April

4月号

春燈



成瀬櫻桃子の句

卒業す右総代は女の子

「素心以後」平成元年

学年を代表して卒業証書を受けとる生徒の名前が呼ばれる。式場に響き渡る清らかな声で「はい」と返事をし、壇上に姿を現したのは女の子。その英姿颯爽ふりに瞠目する参列者の姿が目に浮かんでくる。

女の子は丁度、小学校を卒業する頃に「成長スパート」を迎える。男子より一足先に身長が伸び、大人びてくる様子と「総代」が絶妙に響き合っている。

近藤 真啓

成瀬櫻桃子の句

春の雪子に夢降らすオルゴール

「素心以後」平成元年

愛娘の美菜子さんがうっとりオルゴールに耳を傾けています。きつと楽しい夢を見ているのでしょう。誕生以来、病弱な美菜子さんの事が脳裏から離れる事のなかった先生。ふと窓の外に目をやると、折からの春の雪。あたりを包むかに…春の雪はふんわりと心を和ませてくれます。晩年の先生の穏やかな心境が切々と伝わってきます。よつです。

小林 紫乃

安立公彦



大寒の夕日飽くなく見てゐたり

コロナ禍の天上清に冬三日月

飛ぶものも無き青空や日脚伸ぶ

陽射し得て蠟梅いよよ香を寛に

寂として四界音無く寒明くる

燈下集

○ 田嶋洋子

裁縫好きの夫の指先春炬燵
猫柳好奇心の子に摘まれけり
金縷梅や初心忘るるべからずと
担任の教師の机ヒヤシンス
三十名減りたる名簿余宗なほ

○ 菅澤陽子

平穏な日々を祈るや去年今年
料理メモの切抜き溜まる十二月
端溪に浮く金粉や筆始
青墨の磨り上がりたる淑気かな
枯芝や灯すことなき庭灯籠

○ 長谷川歌子

杜氏らに三国街道風花す
赤べこの合点の首や雪曇
松の内部屋小綺麗に過ごしけり
息抜きの贅沢少し女正月
日脚伸ぶ宣伝カーのエンドレス



○ 平野加代子

啓翁桜楚々と離愁を咲かせけり(庄内寒窓)
春浅し反抗の子の背の四角
回想や朧おぼろのスパイラル
断捨離とゆかぬコロナ禍福は内
豆雛を夫の位牌に添はせけり

○ 金山雅江

惜別の師の句碑を守る寒桜 (念)
冬ざれて入日に遠く古戦場
五輪塔切先天に冴返る
千枚田凍て千様の顔をみせ
梅ふくらむ師の忌父の忌修しけり

○ 太田佳代子

冬木いま健やか空の青透かし
冬野道歩く無心のごと歩く
何度でも巻き上がりくる冬の濤
研ぎすぎの刃に惑ふ末の冬
口中に溶けゆく葉春を待つ

○ 久保久子

菰樽の居並ぶ社初松籟
雪起し鯖街道の坂がかり
山の闇ひきつり来る雪女
比叡風湖中の鳥居朱極む
寒土用地酒を買うて帰りけり

○ 廖運藩

寒波来る牧に犇めくホルスタイン
酒を買ふ片道三里寒波急
廢校の木立悄然寒波来
寒波来る乱を忘れぬ酒二升
寒波来る旧家自慢の大酒缸

○ 久米憲子

初夢の貌の背よりすべり落つ
ことさらの望みはあらず寒の水
戦ひに生き抜く術の炬燵かな
風花や日に日につのる旅心
赤々と流人の島の寒椿

○ 小倉陶女

初雀木洩れ日の如こぼれけり
撫牛をついでになでて福詣
おもたせの豆大福や小正月
鶉色の娘盛りの春小袖
福耳の福助人形春を待つ

○ 荒井慈

薺爪足取りかろきウォーキング
娘よりの勅題菓子を厚切りに
霜強し父の笑顔の翁面
成人の日やお産婆さんへ御礼状
寒明や白濁消ゆる水晶体

○ 宮田豊子

細々とメゾソプラノの芽吹きかな
忘れもの届くる如く春の雪
気遣はれし遠き記憶や猫柳
山水の墨跡ぬくし軸掛くる
おぼつかなき足元おそふ春一番

○ 佐渡谷秀一

一列の雀を前に初日の出
不揃ひの新聞揚げ二日かな
全集の埃きらりと冬日かな
一箱の線香送る寒の入
取止むる催しかぞへ寒四郎

○ 呂秀文

冬帝の気まぐれに寄る椰子の島
元旦やプラン皆無の老いの日々
自慢にもならぬ加齢の年迎ふ
身体髪膚なべて不調や寒波来
隠忍は御免蒙る冬籠

○ 沼田桂子

人智越すコロナの日々や去年今年
癒やすごとと浄むるごとく雪降れり
冬木立手離すものなかりけり
春一番大切なもの持ち去りぬ
シクラメン祈るかたちに凜として

○ 陳妹蓉

折り悪しく抜歯の予約寒波来
早口のテレビ放送寒波来
ブローチの針に刺さるや寒波来
ニュー YORK の孫の葉書や寒波中
旧正の古式何時しか御座なりに

○ 井上正子

福寿草誕生祝控へめに
小正月同級会は取り止めに
雪嶺富士の見ゆる部屋なり選びけり(サ高佳)
寒の明けコロナ感染高止り
夫とお休み握手春の夜

○ 三代川玲子

失せ物を捜しはじまる冬一日
毛糸玉ほぐるるやうに走者散る
浴槽におとす水音夕霧忌
屋台店たたむ夕刻梅白し
待ち針に残る友の名針供養

○ 豊谷青峰

人日やさて行く先の運・不運
江戸の技木遣の粋や梯子乗
初場所や波瀾含みの国技館
魯山人の人柄論ず寒椿
寒鯉や料亭秘話の二百年(山佳)

○ 高埜良子

くつきりとみ空の富士や風揚ぐる(祝・喜信ぎと)
猿曳の心の声を繋ぐ紐
松過や病む友思ひ文を書く
福寿草寄り添ふ友のメールかな
抱き上ぐる子の眼母の眼寒夕焼

○ 吉川隆

下駄音をよろこぶ仏初詣
散りゆける侘助何も語らずに
結ぶ手や言葉は要らぬ落葉道
豊漁の船に群がる春鷗
初富士をゆると浮雲渡りけり

○ 本田保

つくろうて呉るる妻ぬて去年今年
いただきし新約聖書クリスマス
冬至朝七時街灯まだ消さぬ
あらぬ事口走りぬる寒さかな
冬の日の隅から隅へ有難し

○ 瀬戸峰子

里山の吐く息なるや今朝の霧
白鷺の冬田守るかに佇めり
竜の玉まろばせ弾ませ願ひごと
秒針の音よく届く寒さかな
日矢射抜く障子明りに春育つ

○ 片山博介

叡山に細き朝雲春近し
浜余寒乾ききつたる虚貝
わらんべの笑ひ声去りいぬふぐり
幾たびも盆梅の向き正しけり
抽斗をはみ出る下着安吾の忌

○ 今井弘雄

月光や家の近くの沈丁花
信号の赤は桃色ぼたん雪
夕映えのかたかこの花のびやかに
春の月蕎麦を待つ間の独り酒
洗濯機福豆一つまぎれけり

○ 府川昭子

落葉径踏む子拾ふ子蹴とばす子
大空と語り尽くして山眠る
流さるることもまた良し日向ぼこ
大焚火炎に人の酔ひにけり
大寒の鋼のやうな青い空

○ 清水美子

蒼穹の屋根の鳳凰恵方かな
繭玉やエレベーターの獅子螺鈿
年頭の決意を告ぐる父母の墓
蠟梅や関守石の招く風
すり足の歩幅の一步日脚伸ぶ

○ 永島雅子

侘助や吾を迎ふる友の庭
母植糸し庭の水仙仏壇へ
身ほとりの準備終へ聞く除夜の鐘
二階より家族で拝む初御空
指を折り子と七種を数へけり

余言 安立公彦

ばれる歌がある。雄渾、直載、切実な表現を指すと辞書は記す。長歌、短歌、施頭歌他、四五〇〇首収録。この句には、愛誦する万葉集への思いと、新年の淑気が悦びの心情を以て詠み上げられている。

冴ゆる夜や我慢の貌の鬼瓦

鈴木 鳳来

山眠るごとくに眠りたきものを

中村嵐楓子

現在、男女の別なく不眠症の人が多いと聞く。そういう私自身、不眠症と迄は行かないが、寝付きは普通ながら、夜半に目覚めることが屢々ある。その後は眠りが浅い。

作者の睡眠も善い方ではなさそう。冬山の深い眠りの姿を見るたびに、「山眠るごとくに」と言う比喩が身内を締めめるのだ。平凡ながら、朝夕の散歩や軽い運動などは如何なものか。然しそういうことは実施済みのことと思う。善い手立てのあることを願うばかりだ。

万葉歌声張つて読む淑気かな

鷹崎由未子

万葉歌、声張つて読む、淑気、それぞれの言葉に言祝ぎの思いが満ちている。日本最古の歌集である万葉集は、詩歌俳句の中で最も広く人びとに愛されて来た。万葉集の原形は、白文即ち漢字のみで書かれている。世に万葉調と呼

日常の生活に伴う習慣の中で、いつしかそれが伝統とされて受け継がれて来たものは多い。節分の鬼やらいななどは、今でも生活の行事として習慣となっている。この句に登場する「鬼瓦」もその一つである。もともと魔除けとして棟の両端に設けられて来たもの。デザインは多様である。「冴ゆる夜や」を受けて、「我慢の貌の」が善い。如何にもその鬼瓦を近々と仰いでいる景が浮かぶ。まこと、「我慢」と「鬼瓦」はよく釣り合っている。

あだし野の石のつぶやく寒念仏

尾野奈津子

「寒念仏」は、寒中、鉦や太鼓を叩き、念仏をとこなえて市中を歩く修業又は修業者を言う。「化野」は、京都小倉山も麓の野。火葬場のあつた地として知られている。

この句、そういう歴史を背景にしている。この「石」は墓石か。化野の道を念仏を唱えながら歩く修業者。火葬場

近くの墓石は、往時、行き倒れの人を埋葬した石か、その眩ぎを聞くかに歩く念仏の僧。都会離れた化野の石が、今も人を呼ぶかに、夢幻を生きる句である。

端溪に浮く金粉や筆始

菅澤 陽子

「端溪」は端溪硯の略。辞書を見ると、端溪硯は、「墨のおりがよく、魚腦凍、蕉葉白、石眼などと言われる美しい文様があり、最も珍重される」と記されている。「おり」は澱、液体の底に沈んだよどみを言う。

作者は今文机に向かう。書初である。へ大津絵の筆のはじめは何仏 芭蕉の句もある。芭蕉がこの句を記したのは三三〇年前。筆始は出発点である。この句「浮く金粉」が、端溪のめでたさと、筆始を善く支えている。

口中に溶けゆく薬春を待つ

太田佳代子

年が明けて一月も末になると、日ごとに日脚の伸びを感じる。夕方五時前になると薄暗かった窓辺も、思わず空を見上げるような夕暮れの明るさを感じる。春を待つ思いは、四季の中で殊に身近に感じる望ましきである。

この句、「口中に溶けゆく薬」と、「春を待つ」の取合せが薄い、薬は錠剤か散薬か。病中医院で配合された薬ではなく、滋養の錠剤であろう。「溶けゆく」にその思いが残る。

平和な明るい家庭の一景と言えよう。

大空と語り尽くして山眠る

府川 昭子

「山眠る」、善い言葉であり善い季語である。如何にもその山の姿が目に見えよう。この季語を見ると、へ硝子戸にはんけちかわき山眠る 万太郎の句を思い出す。

作者はその眠る山を目前にして、「大空と語り尽くして」と詠み上げる。山容佳く大景を語るの通りだ。その大空は立春前の澄み渡る大空だろう。眠る山にも季節は訪れる。語り尽くした大空に、立春の太陽の昇るの間もない。繰り返す大自然の営みの壮大さが善く出ている句だ。

吉野葛湯白寿の微恙癒やしもし

齋藤 晴夫

吉野葛は奈良県吉野の葛粉。品質の良さが知られている。「微恙」は軽い病いを言う。

作者は今年「白寿」とある。数え年の白寿。春燈では、片桐てい女さんに次ぐお年だ。自身の年齢を一句に織り込んで、「白寿」に老いの風情は感じられない。「白寿の微恙癒やしもし」がみごとだ。「葛湯」も並の葛湯ではない。「吉野葛湯」である。字余りに余裕がある。片桐てい女さんと共に、今後も「不老長寿」を願うばかりです。

当月集

安立 公彦選



○ 宮崎 紗伎

月明の柚子の匂ひや顔をうつ
なぐさめに似て佗助にさす薄日
頬杖に言葉解るを待つ霜夜
北風に逆らひ歩くマスクかな
枯蓮のやぶれかぶれに陽をさらす

○ 坂本 依誌子

千両や庭先で待つ三世代
週末の帰途の歩ゆるむ春間近

○ 種田 利子

穏やかにこやかにあれ初鏡
寒肥す未だ生きるぞと力づけ

鍋蓋のリズムを刻む春隣

たくましき老木の影下萌ゆる

眼病に忽ち心病む二月

人まばらの雨の公園木々芽吹く

眼病や腹括る目に寒椿
姪に世話焼かせてばかり寒の畑

○ 佐藤 まさ子

初晴に水の流れの光りをり
ぼつぺんを吹いて坂道港町

○ 高橋 寛子

独楽廻し父子で遊ぶ広場かな

畦道に摘む七草や姉妹

農園の賑はふ声や小正月

海の泡より生れしヴィーナス初明り
合せ鏡に亡き人さがす二日かな
初夢の君の笑顔をエールとす
七種を摘みし丘なりこのマンシヨン
控へ目に日ごと膨らむ冬芽かな

春燈の句

安立 公彦選



淋しさより深き哀しさ冴ゆる夜半

広島 落久保万里

又呼びぬ応へなくとも凍空に

冬雲雀伝へたき人今は亡く

白椿つらき介護の日々なつかし

福井 西本 花音

水鳥の動くや小さき波光る

春近きこと告げてをり山の色

待春の朝日かがよふ山家かな

和菓子店袖マスクの牛迎へ

さみどりと白美しき七日粥

花八手裏庭なれど端然と

葉付きみかん剥きつ眺めつ筆始

海群青白波拳る波の花

正月や読まず開かず書を積みて

肩すべる絹の軽さや初鏡

逝きし子が夢でくれたるお年玉
初芝居濡れ場の拍手鳴り止まず

松の内早もカレーの恋しさよ

岡山 重実ひとみ

孫の来て買ひ足しに出る三日かな

日脚伸ぶ鯛焼買うて帰らうよ

足跡の夫に似てゐる雪景色

花待たで笑みを泛べて逝き給ふ (樟)

張りつむる五感のゆるび春隣

下校児や列のゆるびて春の声

どこへと問へば梅見と答ふ空真青

人日や母にも供ふ粥の青

十九なる袖に艶見し初鏡

成人式雄途秘めたる誓詞凜

四半世紀の霊鎮むるや阪神道

仙台虫喰ピアノに唱和して鳴けり

いたづらに咲くことの無き一人静

細き手もて木の芽摘みある女の子
春月といへど光の鋭しや